

5/8 国際コース 中嶋嶺雄先生資料

多くの日本人にとって、群が林立する平壤市内の景観はもとより、今日の社会主義世界の歴史的面貌(ハムンヤン)は、中国の首都・北京からさらに遠い北の国際認識など、すべてが関心の的となった。



中嶋 嶺雄
(東京外国語大学教授・海外事情研究所長)

平壤滞在1週間を終えて

その平壤を私は去る四月二十八日から五月四日まで、日本国際政治学会訪朝団(東アジア分科会)の団長として、主に中国・東アジアを専攻地域とする計八名の研究者とともに北京経由で訪れた。これまで中国、ソ連、東欧諸国はもとより、モンゴルやキューバなどの社会主義国をしばしば訪れてきた私ではあったが、北朝鮮訪問は今回が初めてであった。それだけに金日成主席をたたえる巨大な建造物や近代的な高層アパート

り日本やアメリカなど西側諸国で、時には東側の社会主義諸国においても、北朝鮮のイメージは決してよいとはいえない。私の友人のソ連の学者などは、北朝鮮とルーマニアが一番嫌いだ、あんな独裁国家は社会主義の名に恥じる、と同度

民主化運動、程遠い

「個人崇拜」どう乗り越える

たつて、ときには夜おそく、題について、まったく遠慮なく質問し、議論した。そのある朝鮮社会学者協会手ニチエ(主体)科学研究院 深かったのは、黄長輝(ホイテオロク)の一人である。朝鮮民主主義人民共和国 社会科学者協会委員長の二、度にわたる日本語での会見、この国を十分に理解するに、度であり、それは合計八時間、はもとより短かったが、次、私たちは、金日成 金正 半にも及んだ。マルクス主義の諸点をほほ確認できたこと、

も私に語っていた。北朝鮮 日父子の権力継承問題を「唇齒輔車」(しんじほしや)の関係にあるとい、ニスク体制との比較、ソ連のペレストロイカ(立て直し)や中国の天安門事件、の評論、クロス承認問題、中朝・ソ朝関係、第十八黨 委員長は、金日成総合大学 日、四月二十二日、最高人民会議 第九期代議員に再選された金日成主席は、今後も指導的地位に留まると、

チュチエ(主体)思想

北朝鮮社会全般の指導理念となつているイデオロギ、主、国防における自衛、経済化、理論化された、金日成主席が創出し、思想的指針にしている。

(寄稿)